

教 仏 庵 草

第186号
(発行日)
2005年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail---kousien2720kimyou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答①7 光明無量の願

S 「今回は阿弥陀仏の四十八願の中の第十二願についてお話しください」

D 「第十二願は光明無量の願といわれています。大経にはたとい我、仏を得んに、光明よく限量ありて、下、百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覚を取らじ。」
(現代語訳・・・わたしが仏になるとき、光明に限りがあつて、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません)

S 「徳とは」
D 「よき働きとか、よき性質とか恵みという意味です」
S 「阿弥陀仏のよき働きとは」
D 「一切衆生を救済したもう働きです。衆生救済の全体の徳を光明の徳といわれるのです」
S 「具体的な光明の働きはどのようなものですか」
D 「阿弥陀仏の光明の内容は、

たとえば大経には十二光として

説かれています」

S 「十二光とは」

D 「大経には

無量光仏・無辺光仏・無碍光仏・無対光仏・焰王光仏・清浄光仏・歡喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏

と説かれています。このような働きに衆生が照らされて、衆生が真実に導かれ、真実に育てられ、真実にめざめていく、そうして真実に帰入し、真実と一つになる。そういうように一切衆生が真実に教化される全体の働きを光明無量の徳用といわれるのでありましょう。それはあたかも太陽の光が万物を養い育て、実りをあらしめていくようなものです」

*

S 「阿弥陀仏の教化の全体を光明無量といふ表されるのですね。では教化とは」

D 「仏法における教化と云うのは、迷える衆生を教えてさとりの方へ変化せしむということ、仏法によって衆生を教えて、むなししいかりそめの人生を真実みゆたかな人生に変化せし

め、迷いの凡夫を教え育てて仏陀に変えていく、そういう働きです」

S 「光明無量は阿弥陀仏の教化の全体の働きということですが、その教化は真宗の教化だけなのでしょうか」

D 「いいえ、全仏教を含んでいきましょう。『教行証文類』の教巻に

釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。とあり、釈迦が世の中に出られて道教を光闡されたという、その道教とは釈迦の説かれた仏教の全体いわゆる一代教をさしています。その釈迦も

久遠実成阿弥陀仏

五濁の凡愚をあわれみ

釈迦牟尼仏としめしてぞ

迦耶城には応現する

とご和讃にいわれますように、釈尊がこの世に出現されたのも弥陀の働きであると聖人はみとおられます。ですから真宗以外の仏教の教えも、真実へと教え育てられる光明のさまざまなおでだてであります」

S 「他宗教とか他の思想などはどうでしょうか」

D 「それらも真実へと人を導き育てる働きを含んでいるなら、それも弥陀の光明無量の働きといえるのではないのでしょうか。正信偈にも「一切の群生は光照を蒙る」とありますから。そればかりか、自然のいなみや災難なども、人間を真実にめざませる働きをもっている」と、『維摩

経』などには説かれています。そうするとそれらも光明の働きを含んでいるといえます。要するに人間を真実へと養い、育て、めざましめていく働きを光明の働きといっていると思います。賢者は水の音や風の音にさえ、

真実の働きを感じておられます。ただ私たちはそういう光明が働いていることになかなか気がつきません」

S 「仏の光明が無量であるということは私たちを真実へとめざまさせようとする働きが限りなく、働きづめであるということなのです」

D 「そうお聞かせいただいています。ですから人から非難され

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日 (木) 午後二時始まり

講師

大谷大学名誉教授 幡谷明先生

たり、あるいは愛する人を亡くしたり、商売に失敗したりするなどの事象の中にも光明の働きは含まれていましょう。ただ愚かな私たちには智見がなく、こうした中に働いている光明を読み取れないだけです」

S 「そうすると、お寺にお参りしようとするのも、また私たちが法を聞きたいという願いを発すのも、またお念仏を申そうとするもの、それらは仏の光明のお働きがあつてのことだといえるのですね」

D 「ええ、まったくその通りです」

*

S 「けれどもなかなか仏の光明に気がつかない私たちですが、どうしたら光明の働きに気がつくのでしょうか」

D 「それこそ光明の働きによらねばなりません。あらゆるものの中に光明の働きを見る眼へと養い育てるのがすでに光明の教化の働きです。この教化は直接には言葉によってなされます。

仏の光明がかたちを取るといふか、もつとも直接的なものとして現れる、それが覚者すなわち仏陀の説法といわれ、仏の言葉といわれるものです」

S 「仏陀の言葉が端的に仏の光なのですね」

D 「ええ、私たち凡夫にとって、仏の光明の働きの一番具体的なのが仏陀の言葉であります」

S 「仏の言葉が光明の一番具体

的なものだということですが、仏の言葉はどこに示されていますか」

D 「それは仏陀の説法がおさめられていて經典です。私たちは經典に説かれている仏陀の説法を聞くことによって、真実へと導かれて育てられていくのです」

*

S 「仏の言葉を光でたとえるのはどうしてですか」

D 「それについて、聖人はこの如来（阿弥陀仏）は、光明なり。光明は智慧なり」とか

光明は智慧なりとしるべしとなり

と仰せられています。仏の光明というのは仏のさとり智慧だと申されるのです。仏のさとり智慧はそれ自身大いなるさとりであるとともに、迷える衆生をさとりと導き、さとらせていこうとする働きです。それが仏陀の説法です。迷える衆生は真実を見失い、自我を自己として妄想し、真理に心を開かず、無窮の闇に彷徨しているような存在です。そういう衆生を真実へと教化し、真実へと向かわし、

真実をさとらせていく、それはまさに闇夜を照らす月の光のようです。無明の闇に漂っている衆生にとって、仏のさとりから現れる仏のみ言葉は光明といわざるをえません」

S 「源氏物語に（みことばをひかりとして）という一節がある

と聞いていますが、仏の言葉は闇に迷える私たちにとって本当に光りなのですね」

D 「ええ、仏のさとりとその表出である仏の言葉は光明であるというのは、譬えというよりもズバリ光そのものなのですね」

S 「私たちは太陽や月の光、電灯の光のような物質的な光りだけを光といっていますが、精神的、内的な光というのがあるのですね」

D 「ええ、仏教では物質的な光を色光、精神的な光を心光といえます。そのように光には外的な光と内的な光があり、一方は外の世界の闇を照らして明るくし、万物を育てる、一方は内的な光で、心の闇を照らして明るくし、心を養い育てる。どちらにも光という言葉を使っています。ですから仏の（光明）は譬喩以上のものです。智慧イコール光明、光明イコール仏語なのでしよう」

S 「さどりの智慧は光であり、光は仏の言葉。智慧と光と仏の言葉は切り離せないのですね」

D 「仏の言葉を聞くことによつて、人生の進むべき道を知り、何を願い、何に向かつて歩めばいいかを人は知ることができるようです。闇の世にもし光がないと、それこそあっちに行ったりこっち行ったり、あっちにぶつかりこっちにぶつかりで、当てもなく走り回るだけで、そのように人生はむなしく終わってしま

まいます」

S 「そうですね」

D 「また真つ暗な中に光が当たると、いままでわからなかった物の姿がはつきりします。そのように仏の光に照らされる、すなわち仏の言葉によって物事の姿が明らかになってきます。これに一番わかりにくい自分の姿が知られてきます」

S 「仏の光に照らされて、自分の正体があらわになってくるのですね」

D 「また太陽の光が万物を養い育て実りを結ばせるように、仏の言葉はむなしくまどえる人の心を育て、むなしい人生に豊かな充実を与えてくださいます」

S 「そうですね」

D 「また、太陽が出て闇の夜が明けると、うつつとうしい暗闇がはれて明るくなるように、仏の光が私の心に入ってくたさると、暗くてうつつとうしい人生の闇がはれて人生全体が明るくなりま

す。閉ざされた暗い心が開かれて明朗になるのです」

S 「これも光の大きな特徴ですね」

D 「さらには、真つ暗な中ではいろいろな存在の意味や価値がわかりかねます。凡夫だけの心で物や人を見るなら、その有用性や経済的な価値はわかっても、物や人の本質はわからない。仏の光は物や人そのものの尊厳性を知らしめる働きでもあると、先人はいつています」

S 「こういうことで仏の智慧は私どもの心にとつてはまさに内的光といわれるのですね」

D 「ええ、そう聞かせていただいています」

S 「そうすると仏の光明が無量であるといわれるのは、いつでもどこでも光明は働いている。

一切衆生に働いて、一切衆生を真実へと教え育てていく、そういう光明無量の仏になりたいとの法蔵菩薩の誓いが第十二願なのです」

*

D 「この光明の働きを私たちが受けるのは仏陀の教えを聞かせていただくことです。仏陀の教説は一代教といわれ広大なものです。ただその多くは出家修行者を直接の対象として説かれたものです。いわゆる難行道ともいわれ聖道門ともいわれられています。私たち愚かな凡夫にとつては聖道門の教えでさとりを開くということは非常に難しいので、聖道門の教えは私たちを本願の仏法に導いてくださる方便の教えであると親鸞聖人は仰せられています。そして浄土の經典に説かれた阿弥陀仏の本願の仏法こそが凡夫である私たちにとつては直接的な仏陀の救いの言葉であり、阿弥陀仏の慈悲の光明そのものであるというのが聖人のお心であります」

D 「阿弥陀仏の光明という意味が少し分かってきました」

(了)

歎異抄

後序第六講

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、広劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」という金言に、すこしもたがわせおわしませず。（歎異抄後序より）

*

善導大師が「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、広劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」と私たちに仰せくださっています。単に自分の心というのではなくて、心と肉体の全体、私の全存在を「自身」とおっしゃるのです。この自身は、「これ現に」で、過去でも未来でもない、今この我が身が、罪悪深きゆえに、生まれ変わり、死に変わりして、今もなお仏になれずに迷い続けている。今も仏になれずに迷っている証拠としての今の罪業の身とのこと。広劫というのですから、はてしないほど長い間、生死を繰り返して、つねに迷いの海に沈み、流れ転がって、浮かぶ瀬もない身であるとのこと。それで「出離の縁あることなき身」、迷いを離れることが全くできない身と、いわれるのであります。

これは道徳的な反省でなされているのではなく、仏の大悲の御眼に映っている我らの身を深く感じてのお言葉であります。

しよう。それはもはや善導大師という一個の人間の眼に映っている人間ではありません。法蔵菩薩の御眼に見られ、法蔵菩薩の大悲の御心に留められている我らの姿でありましょう。

法蔵菩薩がこのような生死流転の存在をあわれみ、助けようと立ち上がって願を起し修行をしたもう、その大悲の願のかげられた存在、それが出離の縁あることなき身といわれるのであります。

法蔵菩薩の願心をお聞かせいただく時、広大な大悲の願心をお発し、全面的に私どもに代わって仏因を仕上げてください。否してくださらねばならなかったという存在として、本願のお心から露わになり、浮かび上がってくる我らの姿であります。ですから自分の行いの棚おろしをして、「あれも悪かった」「これも間違いであった」「これもおぼしかり」という一々の反省からは出てこないであります。

そこで聖人も、法蔵菩薩の五劫思惟の思し召しを「よくよく案ずれば」と、五劫思惟されねばならなかったほどの「それほどの業」をもちける我が身だと仰せられるのです。

このように「我が身は出離の縁あることなき身」と信じられることを機の深信といえます。ですから機の深信は、「自分はエゴイストだ」とか「私は煩惱の盛んな人間だ」という場合に、それは単に自分の罪悪性を知ることではなくて、罪悪性を知らされるにつけても、それはつまるところ「出離の縁あることなき身」と知ることなのであります。

*

法蔵菩薩が五劫という長い思惟をさ

れ、「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。欲想・瞋想・害想を起さず。色・声・香・味・触・法に着せず」といわれるような菩薩の修行を長く重ねなければならぬ。いほど、私たちの悪業は深く重いのだと知らされるのであります。また私たちに「汝に何も要求も要請もしない、ただ称えるばかりで助ける」とまで阿弥陀仏が私たちに誓われねばならないほど、私たちに真実の行いも真実の心も持ち合わせていないのであると、そのように知らされるのであります。

阿弥陀は私たちを助けるための条件設定を一切されないであります。それは、無量寿経に「かつて一善もなし」とまで仏陀に指摘されねばならないほど、真実の善は一善もたない人間を見ての本願建立であります。阿弥陀仏は念仏往生の願を建てられ、私たちに「ただ称えるばかりで助ける、そのほかに何もいらぬぞ」とまで仰せくださる、「それほどの業をもちける身」なのであります。そこに感じられてくるものは広大な大悲の願心とともに出離の縁あることなき身であります。

救いは「そんな汝を助ける」という阿弥陀仏の本願にあうほかにはありません。「そんな汝を助ける」と仰せくださる南無阿弥陀仏のお心は「出離の縁あることなき身」に浸透したもうのであります。「もはや私のどこにも助かる善も無ければ徳もない、助かる手がかりも手段も道も絶えてしまっている。もうチリほども自分には助かるような縁はない」その人間が同時に「汝をまるまる引き受け」との本願を仰ぐ人間です。そうであれば本願を受け容れるのが難しいというより本願を受け容れないのが難しい。本

願を信じるほかに別の道はなくなるのであります。

「私は罪深く煩惱のとても多い人間です。お恥ずかしいことです」と思いながらも本願をたのまぬのは、なお自分をどこかでのみ、自分はまだどうにかなれるという自力の執心があり、これが「そのままなりで我をタノメ」という本願をお拒んでしまうのではないのでしょうか。

*

機の深信の要は「出離の縁が少しもない我が身」と知らされることであって、自分の悪を単に知ることではありません。「いや自分の罪が知れたのは、仏様の光にあつた証拠だ。松かげの暗きは月の光かな、ということがあるではないか」とよく申されますが、自分の罪がそこそこ知れても、それが機の深信とは必ずしもいえません。自分の罪は反省的知性でもある程度知れるからです。

我が身の罪悪性はどこまで知ってもこれまでという限りはありません。これだけ知らねば仏にあえぬというラインはありません。一生自分の罪悪性を聞いていき、お知らせこうむるばかりです。ここまで聞かねばいけないという境はないのです。しかし、弥陀をたのむ信には「出離の縁あることなき身」いわば「自力無効」という、このことは必ず伴います。たとえ我が身の罪悪性の知りようが浅くても、親鸞聖人や法然聖人ほど、とても私どもは自らの罪を知ることではできませんが、法然聖人や親鸞聖人と同じく「出離の縁あることなき身」ということは信心の内容として必ず具わるのです。

(了)

【初めてのインド4】

私たち一行はコインバトールから次にマジジュライに南下した。この町にはインド最大のヒンズー寺院であるミナクシ寺院がある。見上げるばかりの高い建物の壁に、マハーバーラタに出てくる神々や人や動物などが色鮮やかに立体的に彫刻されている。夕べのお祈りの頃、寺の中に入った。中は言葉では表現できないような独特な神秘に包まれていて、若かったせいかな私は度肝を抜かれた感じがした。広い堂内を見て回って、石畳の廊下にいると、たいまつをかがげ半身裸体で体に文様を施した男たちを先頭にした異様な隊列の集団がやってきた。その隊列の中心にいた人物にたいして、周りのインド人たちがいつせい体全体を投げ出して五体投地の礼拝を شدしたので驚いた。隊列が去ってしばらくすると、私たち日本人（5名ほどいた）に、この寺の住職が呼んでいるということ、招かれて住職の部屋にいった。どうやら隊列の中心人物は住職であつたらしく、私たち日本人の一人に目がとまったらしい。部屋は広い石造りの空間で、奥の方に半身裸の住職が虎の皮の敷物に座っていた。住職は英語で話をされたが、会話ができる同行の女性がいて、彼女の通訳では、人間は死ぬと魂が肉体から離脱し、その魂と住職は話ができることだった。ミナクシ寺からホテルに帰って寝についたが、寺での興奮がさめずとうとう一睡もできなかった。この寺の主神は女神で目が魚の目（ミナクシ）の如くだからミナクシ寺院といわれ、女神の目には宝石がはめ込まれていた。目だけでなく身体全体が多くの宝石類で飾られ、姿がとても華やかかつ神秘的悪くいえばグロテスクである。しかし不思議なことには何か人間の心をグツとつかむような妖しい力があり、また畏怖を感じさせた。寺院の中のさまざまな神像や装飾は仏教寺院に比べて猥雑といえば猥雑、面白いと言えば面白い。それが同時に混沌とした神秘のるつぽに引き込まれそうになる。どうやら

ここらあたりにヒンズー教の強さがあるのでは無かるうか。インドでのイスラム教の強烈な浸透によって仏教はインドから駆逐されたが、ヒンズー教は強固に残りかつ発展した、その力の一端をこの寺院の中で感じた。民衆は透明で清潔な仏教よりもこの妖しいまでの神秘性とか雑多な面白さに引き寄せられるのではないか。さて旅はマジジュライからさらに南下し、インド大陸の最南端、コモリン岬に到着した。岬から船に乗って小さな島に渡った。そこに近代インドの聖者ヴィヴェーカーナンダを記念したお堂があつて彼にちなんだ物が展示されていた。コモリン岬はヒンズー教では聖なる場所、早朝海岸に出ると多くの信者がはるか海上に昇る太陽に向かって祈っていた。旅はここからマドラスに戻る。帰路の途中、ラーマナマハリシの居たボンジシェリーに寄りたかったが、バスの故障で寄れなかった。マハリシは「我を思う我」をどこまでも追求してさとりを達したという近代の聖者で、彼の宗教思想は今もお色あせていない。マドラスからまた長距離列車に乗って北上、カルカッタに向かう。途中、ヒンズー教の聖地であるプリーに寄る。プリーの町を歩くと多くの民家の壁にも宗教的なモチーフが描かれていて宗教性の濃厚な土地である。ただこの頃ちようドイン・パ戦争の影響があつてカルカッタの周辺では特に緊張が続いていた。そういう事情があつて、夜プリーの町はずれを内垣先生と二人で歩いていると、突然大きな声で呼び止められた。見ると二人の兵士が銃をこちらに向けて私たちに何か叫んでいる。言葉が分からない。内垣先生が「土井君、すぐ手を挙げなさい」といったので、即座にホールドアップをした。内垣先生がなにやら片言の英語で相手に話すと、兵士たちは了解したらしく、解放してくれた。プリーのような田舎町に見慣れない異国風の男たちが夜中歩いていたのだから、彼らは不審に思ったのである。今までの人生で銃を向けられたのはこの時だけである。

(続)